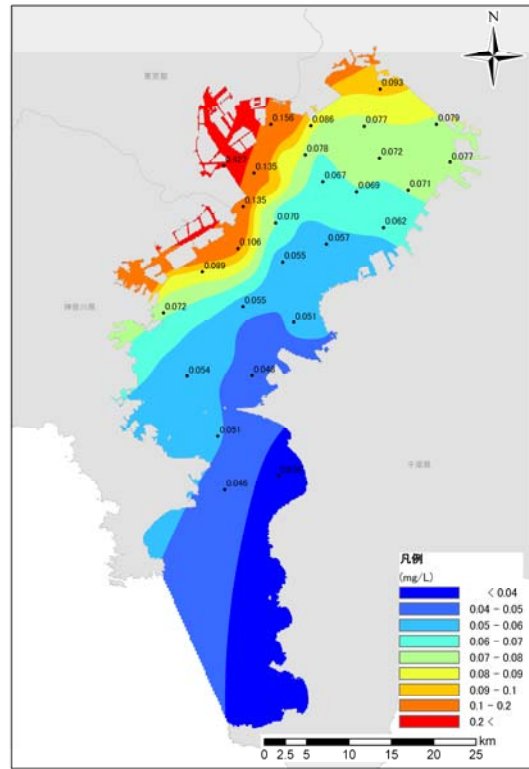


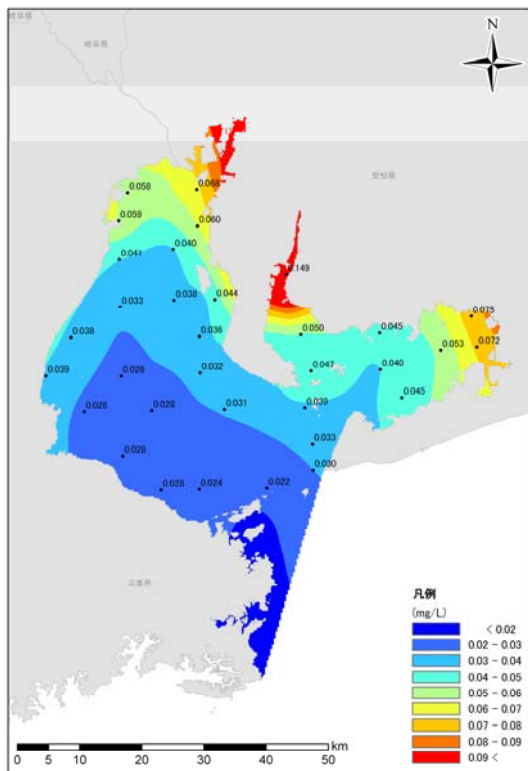
昭和 57~59 年度の平均



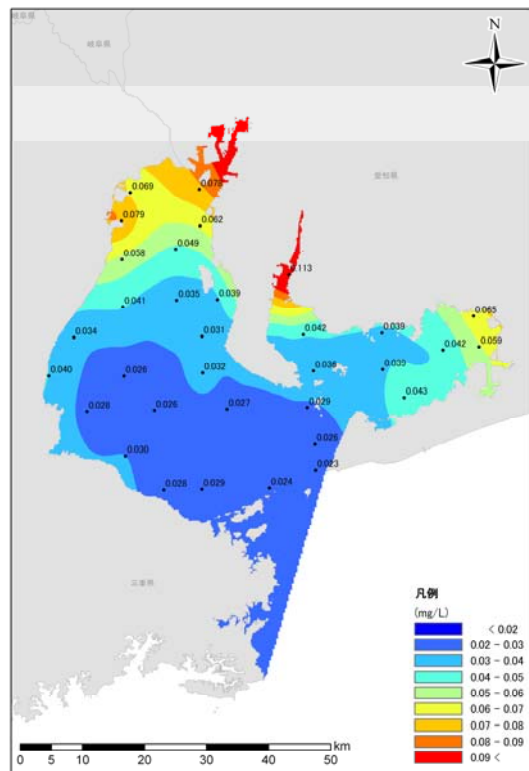
平成 18~20 年度の平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-12 東京湾における T-P の分布



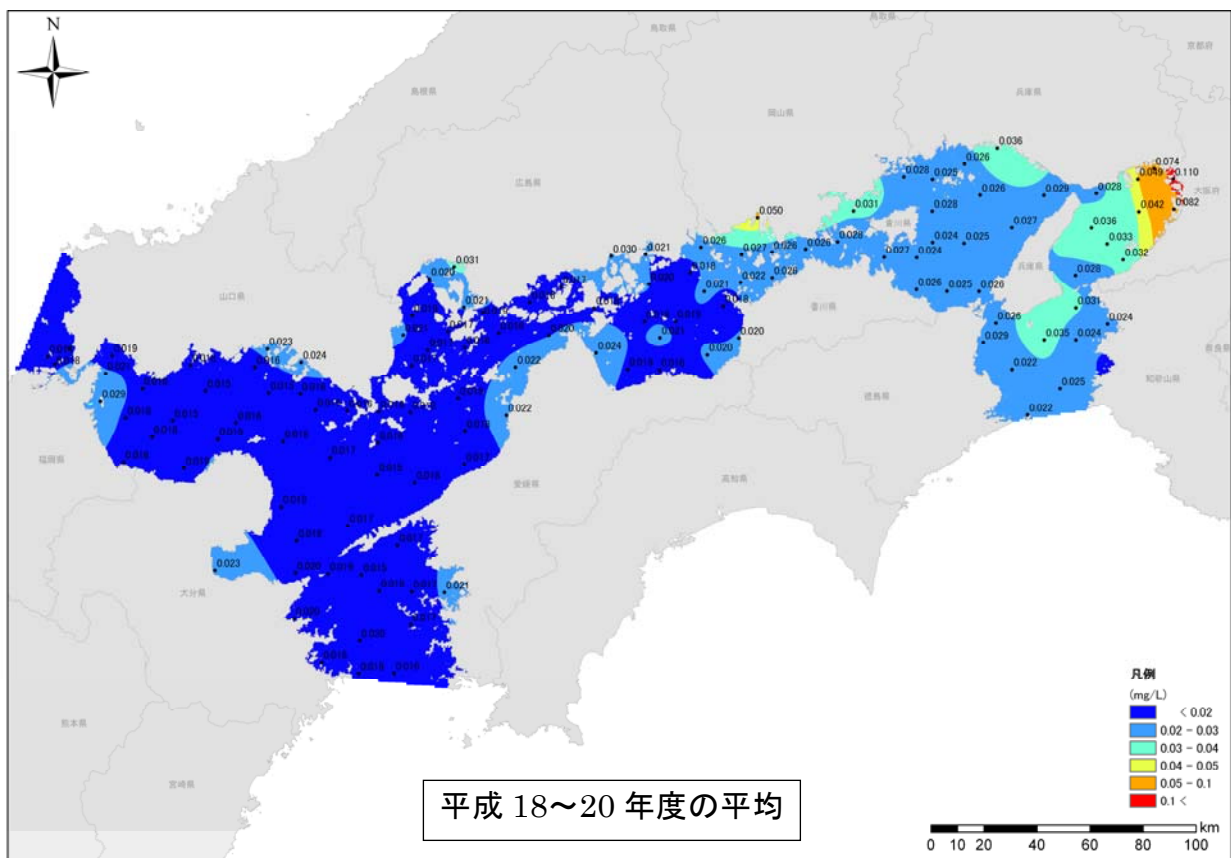
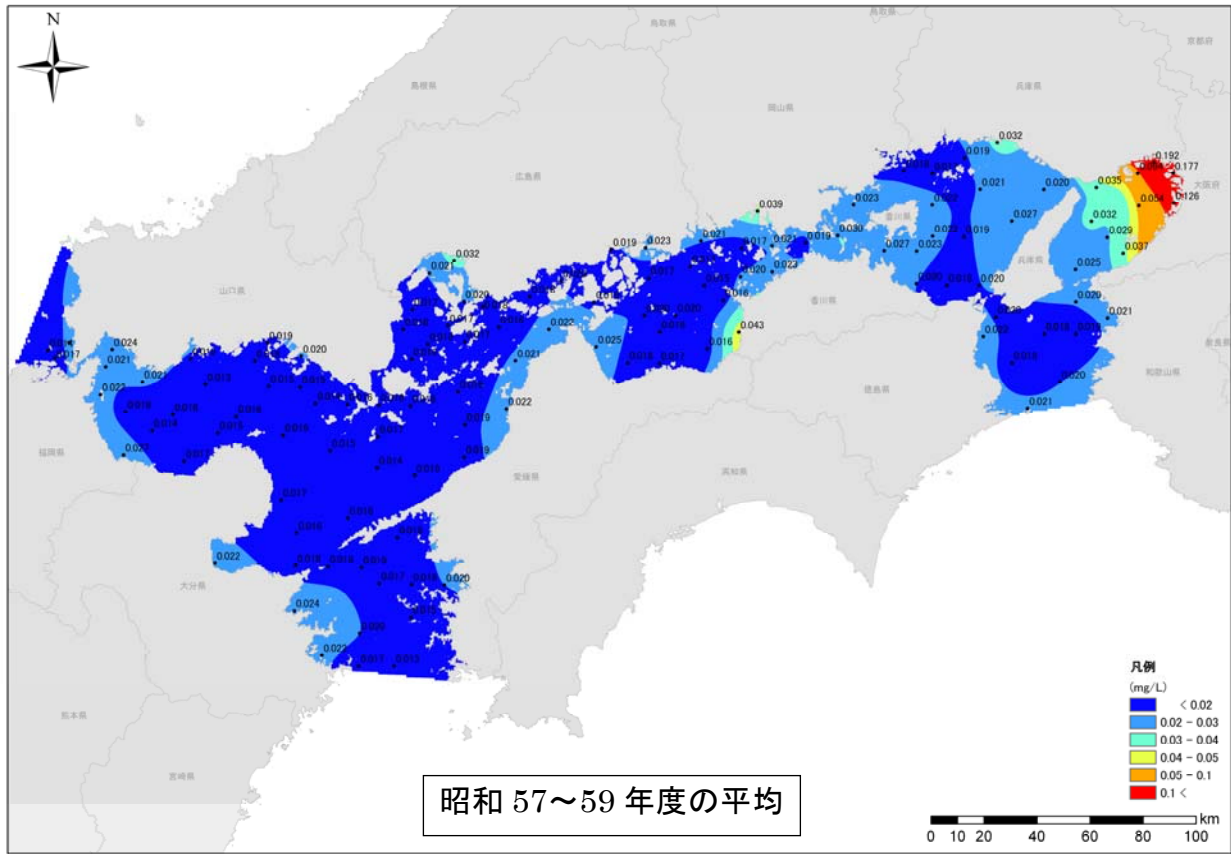
昭和 57~59 年度の平均



平成 18~20 年度の平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-13 伊勢湾における T-P の分布



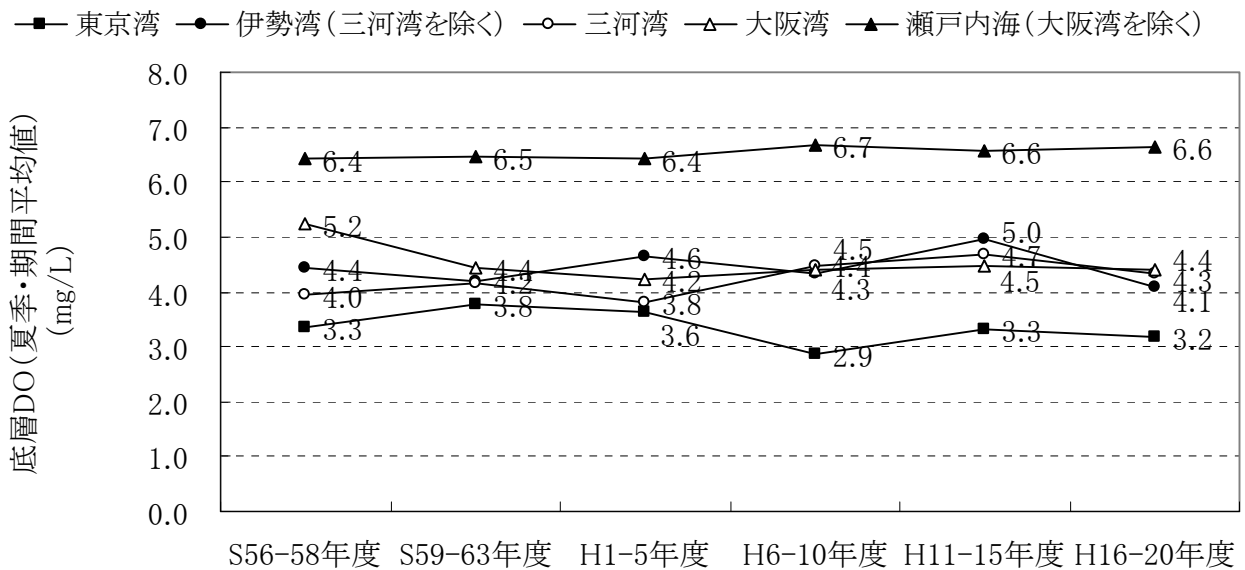
出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-14 瀬戸内海における T-P の分布

#### (4) 底層DO

指定水域における夏季の底層DOは、瀬戸内海（大阪湾を除く）が最も高く、続いて大阪湾、三河湾、伊勢湾（三河湾を除く）、東京湾の順となっている。

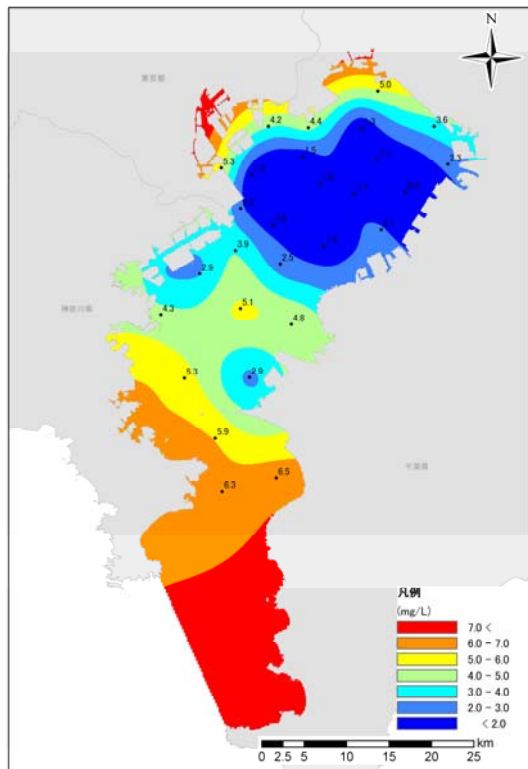
昭和56年度から平成20年度までの推移を見ると、東京湾については3 mg/L 台の低い濃度レベルで推移している。伊勢湾（三河湾を除く）、三河湾、大阪湾については4 mg/L 前後で推移し、瀬戸内海（大阪湾を除く）については6 mg/L 台で横ばいに推移している。（図5-15）。



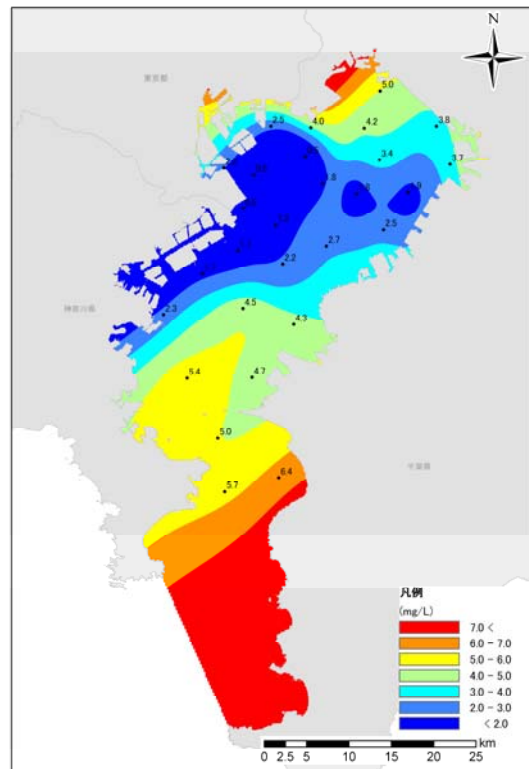
出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-15 海域別の夏季底層DOの推移

また、総量削減の開始された当時と近年の水平分布図を比較すると、東京湾については東京湾中央部において貧酸素傾向が強く、神奈川県側に拡大している。伊勢湾については伊勢湾中央部において底層DO濃度が低下しており貧酸素傾向が強くなっているが、三河湾においてはやや改善している。瀬戸内海については大阪湾奥部において貧酸素傾向がみられるものの全体として変わりはなく概ね良好である（図5-16～18）。



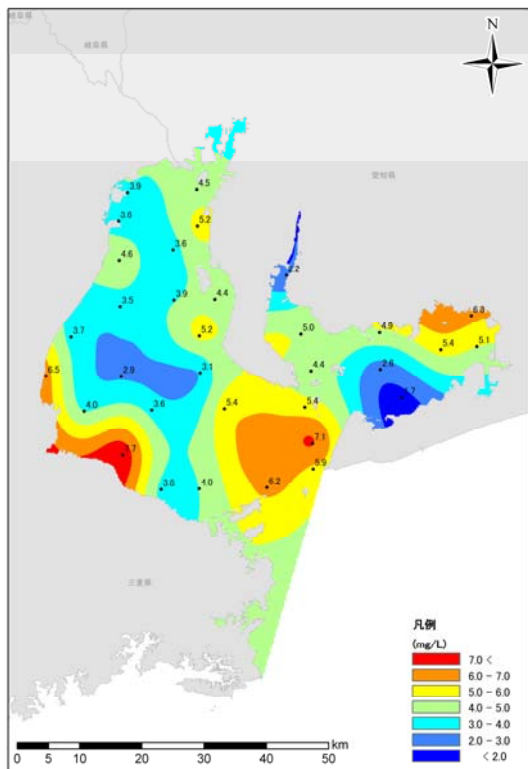
昭和 57~59 年度の夏季平均



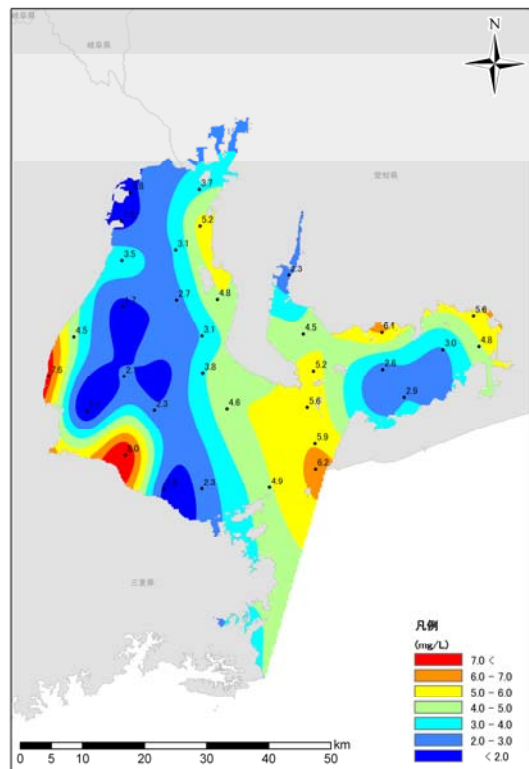
平成 18~20 年度の夏季平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-16 東京湾における夏季底層 DO の分布



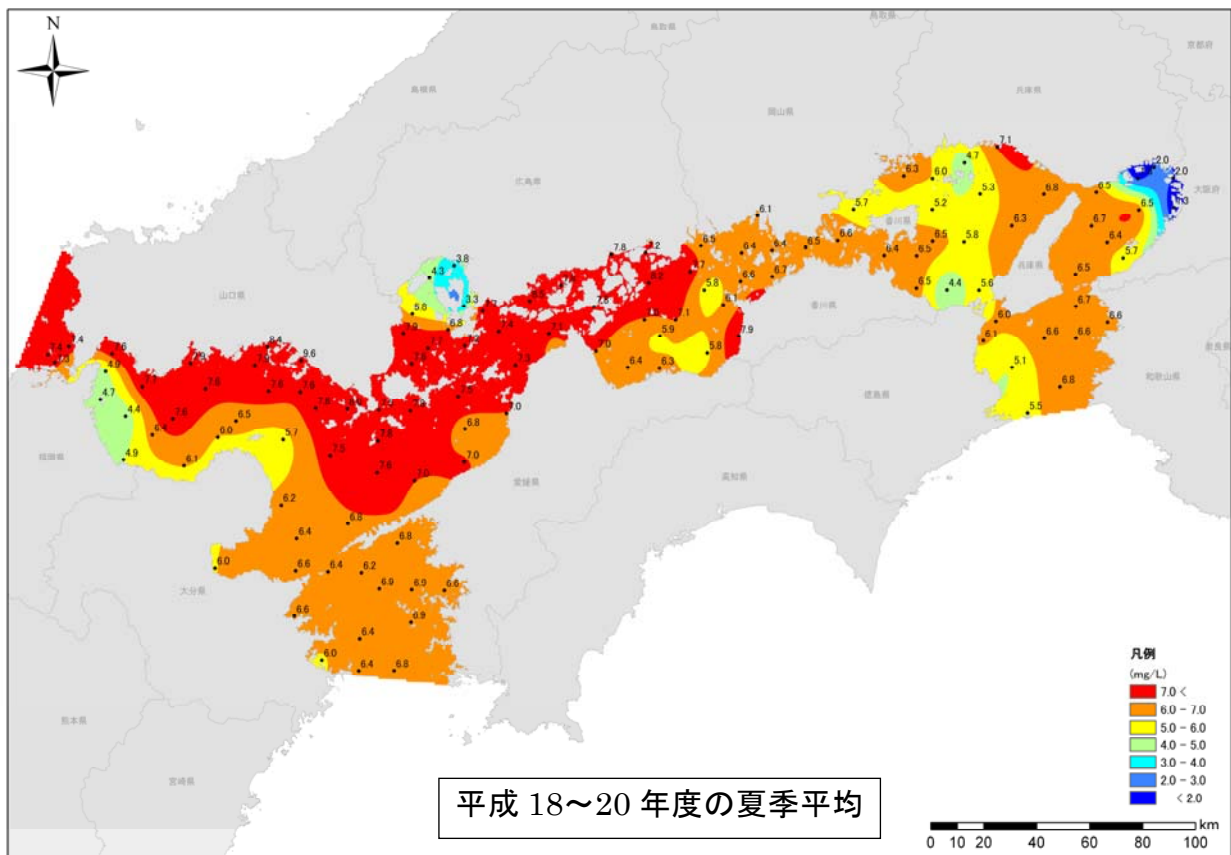
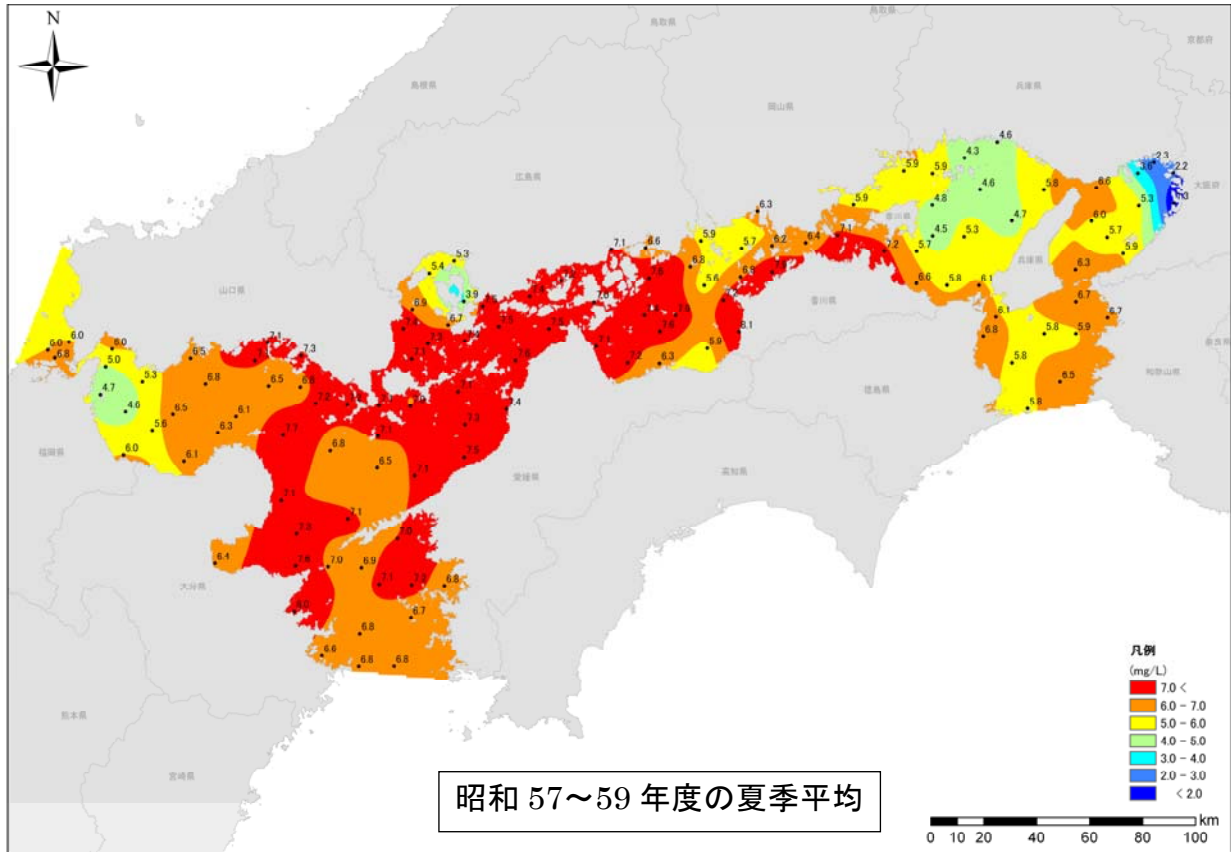
昭和 57~59 年度の夏季平均



平成 18~20 年度の夏季平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-17 伊勢湾における夏季底層 DO の分布



出典) 広域総合水質調査 (環境省)

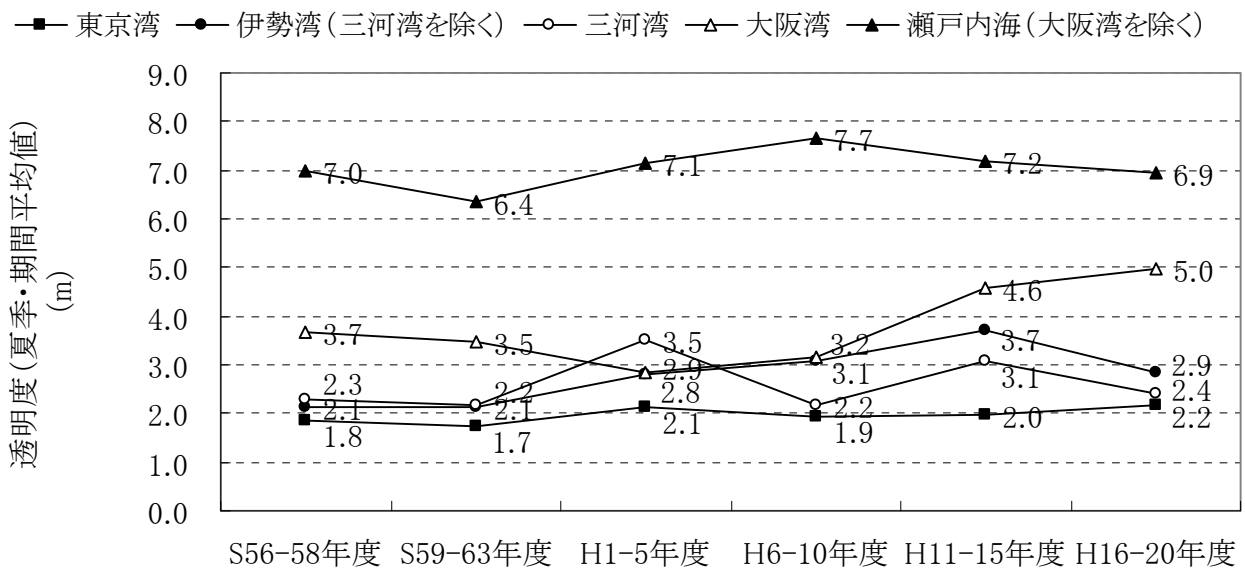
図 5-18 瀬戸内海における夏季底層 DO の分布



## (5) 透明度

指定水域における透明度は、瀬戸内海（大阪湾を除く）が最も高く、続いて大阪湾、伊勢湾（三河湾を除く）、三河湾、東京湾の順となっている。

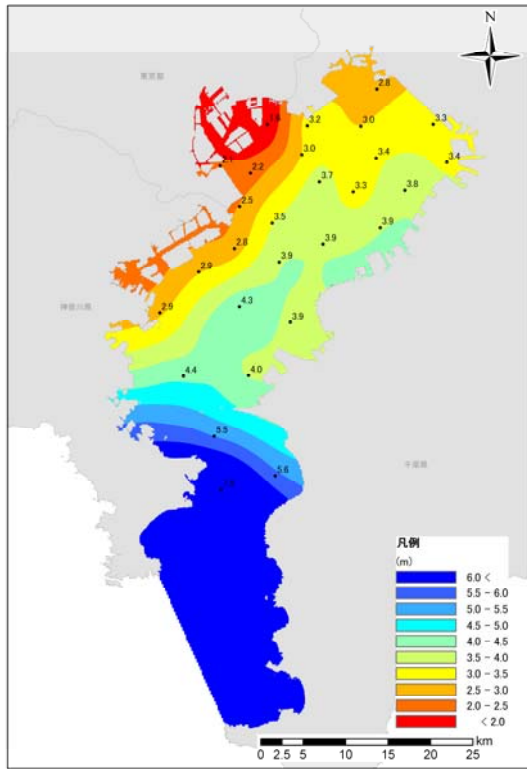
昭和 56 年度から平成 20 年度までの透明度の推移を見ると、瀬戸内海（大阪湾を除く）は 7 m 前後、東京湾は 2 m 前後で横ばいであるが、大阪湾については透明度の上昇傾向が見られる。伊勢湾（三河湾を除く）及び三河湾については平成 11～15 年度までは上昇傾向であったが平成 16～20 年度では低下している（図 5-19）。



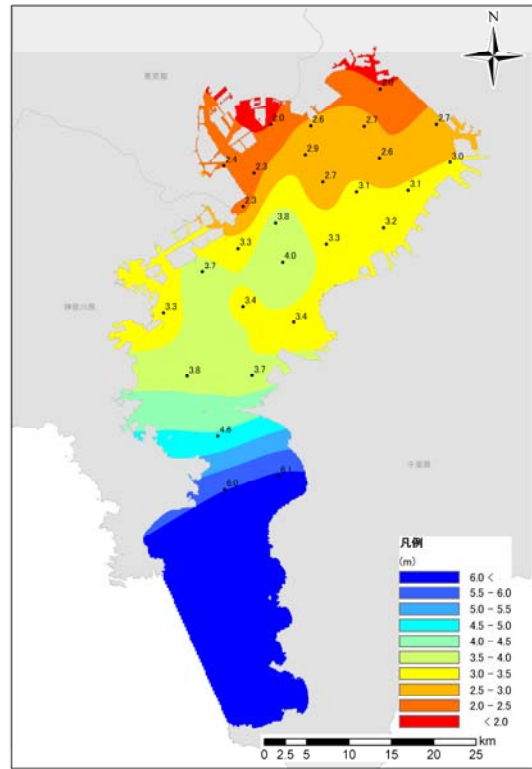
出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-19 海域別の夏季透明度の推移

また、総量削減の開始された当時と近年の水平分布図を比較すると、東京湾については、東京都及び神奈川県沿岸部で透明度がやや低下しているが、千葉県沿岸部では上昇している。伊勢湾については大きな変化はなく、瀬戸内海についても分布に大きな変化はないものの、全体的には透明度が上昇している（図 5-20～22）。



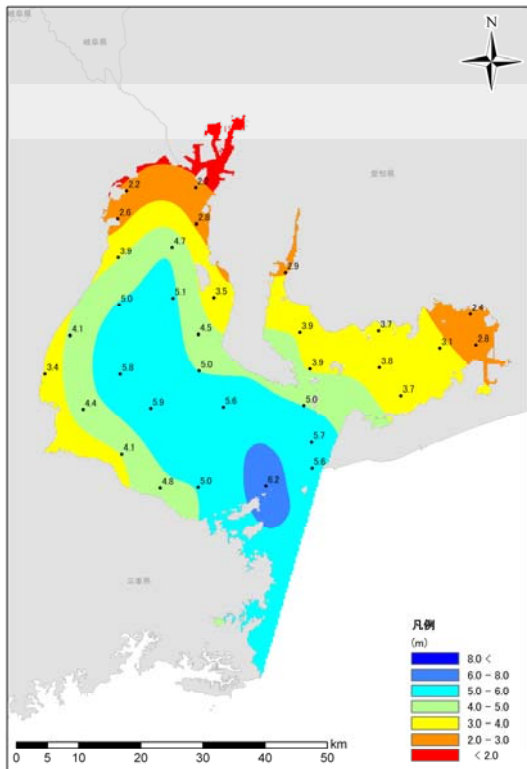
昭和 57～59 年度の平均



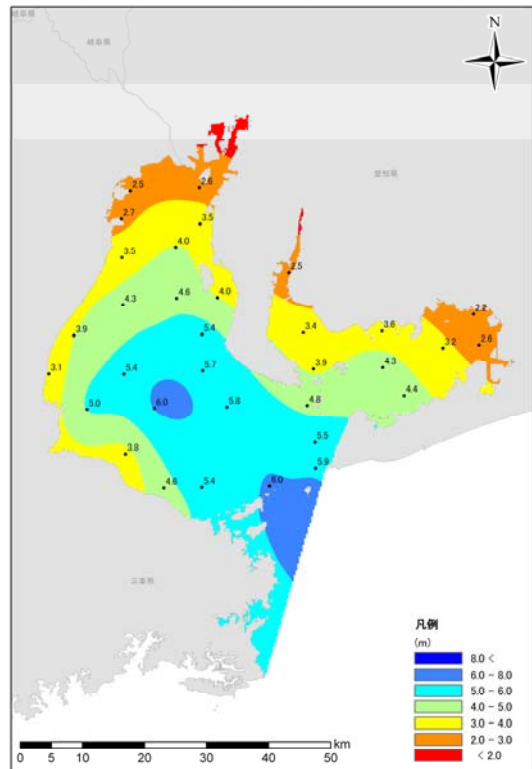
平成 18～20 年度の平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-20 東京湾における透明度の分布



昭和 57～59 年度の平均



平成 18～20 年度の平均

出典) 広域総合水質調査 (環境省)

図 5-21 伊勢湾における透明度の分布